

ローカル・マーケット論の文脈

——日本森林荒廃史の書き換えに向けた足がかり——

大 倉 季 久

キーワード：森林問題，木材市場，経済社会学，
ローカル・マーケット

はじめに：本論文の課題

この論文では、これまで筆者が研究の対象としてきた現代日本の森林問題の経済社会学的分析から得られた、「経済に内蔵された持続可能な森林管理のメカニズム」という着眼を手がかりとして、その具体的な成り立ちを考察し、筆者が「ローカル・マーケット論」と呼ぶ経済社会学の新しい研究領域の確立を促す文脈を明らかにすることを目的とする。まず、現状の林業経営の危機的状況から、現状の木材市場の歴史的・文化的起源を解明する研究視角の必要性を指摘した上で、経済社会学的視点に依拠しながら森林管理を促進する木材市場の来歴について考察を進める。そこからローカル・マーケットという着眼を得て、それをカール・ポランニーのローカル・マーケット概念と重ね合わせつつ、その成り立ちを概観する。以上のような整理・概観を踏まえて、市場の起源を問う視角としてのローカル・マーケット論が、市場生成を支える文化的次元に着目していく視座となりうることを示したい。

1. 問題の所在

1.1. 揺れる森林問題の現場から

現代の経済現象、とりわけ市場をめぐる生じている現象について、その歴史的文化的背景から説明しなければ、その特徴やメカニズムを捉えることができないような事柄がますます増えてきているのではないか。筆者がこのように考えるようになったのは、これまで研究の対象としてきた現代日本の森林問題の現場でみられる林業経営者たちの「あきらめ」からである。

もともと木材の相場は乱高下が激しく、1年のあいだに20%以上取引価格が変動することも決してめずらしいことではなかった。木材の事情をよく知る林業経営者は、木材価格の上昇だけでなく、下落することにもそれなりに慣れているのである。かつての木材市場は、たとえ木材の価格が下がってきても耐えて待っていれば価格は回復していたとか、不況も、自力で乗り越えることができていた、そう語る林業経営者が少なくないのである。

しかし近年の木材価格の下落に対する林業経営者の反応は、これまでとはまったく異なるものになっている。こうした木材のことをよく知る林業経営者のあいだで森林の管理を放棄して、森林を放置したり、保有する山林の木材をすべて伐採し、伐採後は放置するといった行動が目立つ。2つの対応は、形式としてはまったく異なるが、経営の存続を断念しているという点では変わりはない。

問題は、なぜ今日、林業経営者たちがこのような行動をとっているのかという点である。注意深く林業経営者の言葉や行動を追ってみると、管理放棄の背後で、自分たちが利益を獲得するためにあるはずの市場に対する信頼が低下していることがはっきりする。例えば、現状の木材マーケットから離脱して新しいマーケットを形成し、木材供給を開始した「近くの山の木で家をつくる運動」の展開からは、現状の木材マーケットのあり方に対する林業経営者たちの批判的な認識を明確に見て取ることができる。これまで筆者が注

視してきたのは、そうして信頼を寄せることができなくなったマーケットを問い直す、あるいは異議申し立てをするという行動が、既存の市場の外部に新たなマーケットを建設するというかたちをとって始まっている点であった¹⁾。既存の木材市場のあり方を批判する林業経営者たちは、新しい木材市場を立ち上げるに至っているのである。このことは、今日の森林管理の危機が、需給変動やそのなかで生じる価格変動だけに由来するものではないということを示唆するとともに、今日の木材市場が、取引の前提となる信頼関係を支える要素から大きく変化しつつあることを示している。歴史的に振り返って、今日の木材市場は、伝統的な市場とは、市場に参画するアクターから、アクター間の取り決めの基準まで、木材市場をめぐる考え方がまったく異なるものになりつつあるというわけである。

1.2. 「経済に内蔵された持続可能な森林管理のメカニズム」の発見

森林管理の危機が、このような取引を支えるアクター間の取り決めやそのあり方の変化のなかで生じているのだとすれば、ではかつての木材市場の成り立ちとは、具体的にどのような取引関係に支えられた市場だったのだろうか。本稿の課題は、以上のような森林問題の現場で林業経営者たちの経験に立脚しつつ、伝統的な木材市場の成り立ちについて考察を加え、そこから今日の木材市場のあり方とも対比しつつ、市場生成を支える文化的次元を捉える着眼点や視角について検討することにある。より具体的にいえば、それは「ローカル・マーケット論」という着眼につながっていく。

筆者はこれまで現代日本における木材市場の構造変動の実態と荒廃林の拡大とのかかわりを「人びとの経済行動は、具体的で進行形の社会関係の構造

1) 例えば、1990年代後半以降、各地で林業経営者と製材業者、設計士、施工業者が組織した「近くの木で家をつくる運動」がこれにあたる。「近くの木で家をつくる運動」については、緑の列島ネットワーク（2000; 2004）、および大倉（2006）を参照されたい。

に埋め込まれている」という言明（Granovetter 1985）を基礎に据えた「新しい経済社会学」の視点から明らかにしてきた。市場の中での取引関係の変化が、林業経営者の行動の変化と少なからずかかわっていることを明らかにしている（大倉 2006; 2008）。研究を進めていく段階で気がついたのは、林業経営者にとって現状の木材のマーケットが、自分たちが参画して構築した市場ではないという点が、林業経営者の「あきらめ」を生み、管理放棄や再造林放棄を拡大させているのではないかという点であった。

もともと木材のマーケットには、林業経営者が深く関与しながら立ち上げたものが少なくない。後述するように、そうしたマーケットの中で林業経営者たちは、製材業者や小売業者との関係を密にして、供給を調節しながら森林管理の継続を図ってきた。そこにはいわば、「持続可能な森林管理のメカニズム」が組み込まれていたのである。しかし現状の木材市場では、林業経営者の置かれた立場、例えば保有する資源の質・量が考慮されることはほとんどないように思われる。

このことは、同じ木材という財を扱う市場であっても、誰と誰とのあいだで築かれたかによって、資源の流通のあり方が大きく変わってくることを示している。かつての、林業経営者が信頼を置いていた木材市場では、供給量が調節され、また森林への投資としての森林管理も持続的であった。つまりそこには、「持続可能な森林管理のメカニズム」が組み込まれていたともいえる。林業経営者たちの現状の木材市場に対する信頼の低下は、このような、林業経営を支え方向付けてきた「持続可能な森林管理のメカニズム」が、今まさに失われつつあることを示唆している。

そしてこのような検討から覚えたのは、現代日本における荒廃林の拡大が、木材市場における取引関係のあり方という水準での変化から生じているのであれば、変化はどこからはじまっているのか、変化以前の市場とはいかなる市場であったのかを具体的に描くこと、さらにいえばそもそも森林管理を促進する持続可能な森林管理のメカニズムを備えた市場とは、どのような市場

だったのか市場の歴史的文化的起源を明らかにしていく分析視角の必要性であった²⁾。

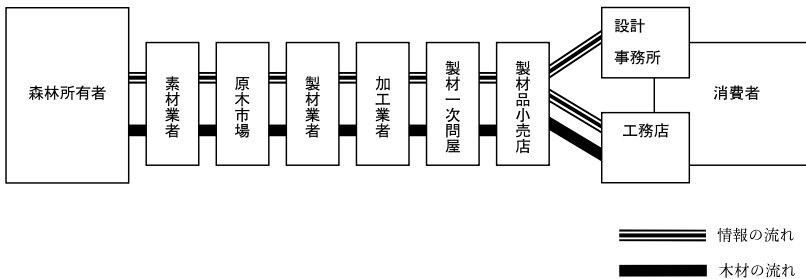
管理放棄や、市場からの離脱といった今日の林業経営者の危機への対応は、市場の成り立ちが大きく変化していると同時に、森林管理を支え、また促進する木材市場の存在を示唆する。次節ではまず、伝統的な木材市場のあり方について、林業経営者がどのような社会関係の構造のなかに埋め込まれていたのか、「新しい経済社会学」の着眼からも示唆を得ながら明らかにしていこう。

2. 木材市場の来歴

2.1. 木材業界の基本構造

一般に、住宅用木材は、図1のように森林所有者から工務店までが数珠つなぎになって流通経路が組織され、木材はその経路を順に流通していくというのがその基本的な骨格である。つまり、隣り合っているなじみの業者しか

図1 一般的な国産木材流通モデル



2) この課題設定は、ジョン・R・ヒックスが、「市場の勃興」をめぐって述べた次の主張から示唆を得ている。「わたくしは『市場の勃興』はひとつの変容であると述べてきた。それでは何が変容してきたのであろうか。また、それ以前に何が存在していたのであろうか。その変容過程を理解しようと望んでも、この本質的な点についての考えを何らかのかたちで、あらかじめもっていないかぎりそれは不可能である。」(Hicks 1969=1985: 24)

知らない、取引しないというのが基本で、隣り合っている業者の状況を熟知している一方で、それを飛び越えたところの業者がどのような木材を持っていてそれを誰に流しているのかをはっきりと知らないことも稀ではない。実際、多くの地域で、森林所有者は、自ら素材生産の組織を持っていなければ、原木市場や製材工場のことまでは知らないのが普通であるし、設計士も小売まで立ち入ることもないし、場合によっては隣り合っている業者を飛ばして取引関係を構築することは、「抜け買い」とか、あるいは「業者飛ばし」などといわれて、しばしばタブー視されてきた。そうして売買は伝統的に小規模かつローカルな範囲で構成され、特定化された取引相手との取引を消滅させないことが重視されてきた。これについて、例えば村嶋由直は、1960年代までの吉野地方の林業に関する関係者の次のような発言を紹介している。

立木売りは山守に売る場合と山守に非ざる（ママ）素材業者に売る場合に分けられる。山守に売られる場合は通常2、3割くらい市価より低い。これは山守の特権である。彼らの多くは素材業者を兼ね、中には製材業者を兼ねている場合がある。彼らに売られなかった立木は他の素材業者（または製材業者）に販売されるが、林主が商談を進める場合には山守の仲介が必要であり、もし仲介なしに林主が行えば‘抜け買い’として非難される。（村嶋1987：144）

木材業界は、このようにして流通網が、用途ごと、部材ごとに隔てられ、さらにそれが地域ごとに隔てられるかたちで成り立っている。住宅用木材といっても、単一の市場が単一の業界によってコントロールされてきたわけではなく、産業全体が用途ごと、さらには地域ごとに細分化され、しかもそうした無数の市場がそれぞれ制度的条件の異なる市場を創り出しつつ供給全体をコントロールしてきたという点に、伝統的な日本の木材市場の特色があるといえよう。そして各々の業者は、このような複雑な供給経路の成り立ちを前提として、供給可能な部材を特化し、さらにそれを目の届く範囲の中で取引

を行い、供給の安定化を図っている。そして林業経営も、こうした業界の成り立ちに制約を受けながら、自然条件や流通経路などの事情から、木材生産地各々が板なら板、柱なら柱、造作用なら造作用というように、地域ごとに部材の特殊化を図り、また、複数の流通経路を組み合わせるなかから、独自の育林サイクルを構築し、産地を形成しながら、森林管理の組織化・体系化を図ってきた。

このようにして木材の売買は、一般に、それぞれが固有の慣習やルールを備えた無数のローカルな売買のネットワークの中で行われてきた。資源が流れる空間が、異なる歴史的、地域的条件を背景にして構築されたローカルな木材売買のネットワークによってコントロールされていたのである。

以上が、住宅用木材の流通の基本的な成り立ちである。そして、「経済に内蔵された持続可能な森林管理のメカニズム」は、このようなローカルな木材売買のネットワークの中から立ち上がってきたと考えられる。では、そのようなローカルな木材売買を通してコントロールされてきた木材市場から、どのようにして「森林管理のメカニズム」は組み込まれていくことになったのだろうか。

2.2. 社会関係の働きとしての「調節」

ここで、「持続可能な森林管理のメカニズム」を根底から支えている行為とは、特定化された取引関係における、「他者が協力してくれたから、自分も協力しよう」、逆に「他人が非協力なら自分も協力しない」、あるいは「他人がここまで譲歩してくれたから、自分も譲歩しよう」という「互酬性 (reciprocity) の原理」(Gouldner 1960; Blau 1964) に基づく木材供給の「調節」のことを指す。ローカルな木材売買のネットワークのなかで絶えず供給が調節されることで、木材価格の急激な変動が抑え込まれていたのである。

例えば、ローカルな木材市場では、売買をめぐる駆け引きの中で林家が土

場で意図的に在庫を持ったときには、それを合図にして製材業者が流通を止めるとか、また取引の範囲を限定して、その中でコンフリクトを回避し、相互の存続を図りつつ木材を差配し流通をコントロールしていた。つまり、木材の流通量が増え、価格が下がってくると木材の取引を縮小し、流通する木材量が調節されて、再び価格が上昇したときに取引を増やしていくのである。そしてこうした製材業者や木材業者を中心とする木材市場のコントロールは、1960年代の外国産材の輸入自由化以後もただちに消滅することはなく、外材市場とローカルな木材市場との並存関係がしばらくは継続していくことになるが、それは単に価格が上昇を続けたことではなく、その背後で維持されていたこのようなローカルな木材業界内部における長年の売買の中で培われ維持されてきた社会関係の中での木材供給の「調節」が、時にはネットワーク内部でのコンフリクトを発生させつつも、業界としてのまとまりや連帯の基礎となり、それが、木材の買い叩きや投機的な売買を抑制し、林業経営に安定をもたらしていたと考えられるのである。

つまり、ここで取引関係のなかでの互酬性の原理が働いていたということは、取引が、純粋な意味での経済的な交換、つまり交換されるべき正確な量を明記する公式の契約だけでなく、「特定化されない義務」(Blau 1964=1974:83)をともなっているということ、また、森林管理が社会関係の働きによって形づくられ、方向づけられてきたことを意味する。

伝統的な木材市場では、ある個人に対する他者の行為にどのような期待が含まれているのかがあらかじめ確定されておらず、個人はとにかく他者から受けたサービスに対して義務を履行しようとする。そして相互関係の確立と成長が、信頼関係を作り出していくことになる。「純粋なセルフ・インタレストに発したものであっても、交換の反復的な漸次に拡張する性格を通じて、社会関係のなかに信頼を発生させるのである。社会的交換のみが、個人的義務、感謝、信頼の感情を引き起こす傾向がある」のである (Blau 1964=1974:84)。そして、このようにして「個人間でさまざまな種類の利益の交

換が拡張するに連れて、次第に彼らは相互依存的になり、社会的絆を強化する」わけである。そこで「返礼しなければ信用と信頼が失われる。そしてついには今後の交換から除外され、とりわけ義務をきちんと履行しない人間だ」という悪評が地域社会に広がるにつれ、社会的地位の全般的な失墜が起こる」(Blau 1964=1974: 95)。木材産業の内部での取引においてもこのような互酬的な義務関係の確立が、交換に安定をもたらしていたと考えられる。

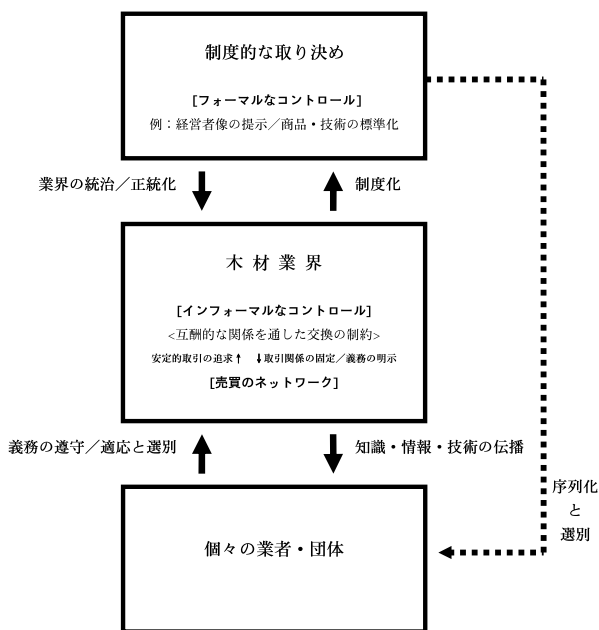
木材市場に組み込まれた「持続可能な森林管理のメカニズム」は、このような木材供給をコントロールしつつ林業経営に森林資源の蓄積を喚起していくフォーマル／インフォーマルな制度的条件から立ち上がっている。持続可能な森林管理を支えたメカニズムは、単に需要や価格の上昇にもなって生じたのではなく、社会関係の働きから制度化されている。ここでいうフォーマルな制度的条件とは、商品のグレードやどのような業者が優れた業者なのか、業界内部での序列を決定づける認知枠組みのことであり、インフォーマルな制度的条件とは、そうしたネットワークの形成を支え、規制するメカニズム、この場合で言えば互酬性の原理がそれにあたる。伝統的な木材市場の場合、これがきわめて狭い、あるいはローカルなネットワークの中で、多様な形態を取りながら成立し発達してきた点が特徴である。そしてこの制度的条件が維持され、安定的に存続していく、つまり慣習化していくなかで林業における森林管理は発達していくことになる。

2.3. ローカルな木材市場が支える森林管理：序列化と適応の中での発達

以上の議論からそれをまとめると、図2のようになる。

すなわち、伝統的に木材市場は、つねにインフォーマルな義務関係や信頼関係に支えられていて、その中から、地域の自然条件などを考慮しながら木材の評価基準を制度化していくとともに、望ましい経営者像や経営モデルを制度化しつつ、他方では、個々の業者の序列化を進めていく。実際、売買のネットワークが互酬的な関係によって支えられていることは、相互の経営規

図2 木材市場のローカルなコントロール



模や供給可能な木材の品質が参照可能で、行動様式を一定程度予測できることを意味するから、個々の業界内部で、商品の等級が明確に区分され、また業者間の序列も発達していくことになりやすい。

しかし業界内部の義務関係や信頼は、自然発生的に立ち上がってきたわけではない。市場では、フォーマルな制度的取り決めそれ自体によって個々の業者は選別されているために、個々の業者は義務を遵守することで取引関係への適応を図る一方で、供給可能な経路をつねに選択しているからである。林業経営者も、特定の市場で販売経験を積み重ね、そこに精通するにつれて、市場を選別するようになる。例えば選りすぐりの木材を供給する経路が特定化されてくると、製材業者は持続可能な管理に資する関係を大切に、その存続を支えるようになるだろう。ただ、「大切にされる」、「絶やすことを防

ごうとする」取引関係は地域に応じて、またそれぞれの業者の歴史的条件に応じてさまざまである。そのなかには、例えば大工が一軒分の木材を買い付けに山へ赴くといったケース（単発的だが細々とした供給経路）も含まれてくる。林業経営は、市場への適応を図ると同時に、自らが相対的に優位に立つことのできる市場を選択しつつ、計画化を進める。

このように、インフォーマルな関係形成のメカニズムを前提にして木材供給の調節が図られ、コントロールされていたことは、業界内部のアクターが、相互に対等であるということの意味しないし、むしろこのような市場の働きゆえに、このようにして個々の市場が取り扱う木材の等級や、業界内部の序列が明確になり、また市場の境界も次第に明確化されてくる。各々の林家は、取引相手と接触し、互酬的な関係を構築し、選別と適応を繰り返しながら、独自の施業体系やあるいは育林サイクルを確立して、特殊化（あるいは産地形成）を図っていくようになる。日本の場合、木材や製品を測る単位や施業方式が、市場の境界に対応するかたちでローカルに発達してきたが、それはこうしたローカルな木材売買のネットワークが、資源が流れる空間それ自体を基礎づけているからだと考えられる。

そして、木材供給の調節がそうであるように、とりわけ業界全体の存続が危機的状況に直面したとき、「経済に内蔵された持続可能な森林管理のメカニズム」は顕在化してくる。林業をめぐる問題をみるうえで、価格変動だけでなく、このような市場に参画する人びとが構築する売買のネットワークの構成と森林管理とがどのようにかかわりあっているのかを理解しておく必要がある。

とりわけ森林管理との関係でこのような社会関係の働きが重要になってくるのは、それがフォーマルな制度的条件をコントロールしていたという点である。人工造林を行った場合、植林から伐採まで、短くても30年～40年を要する。それゆえ、林業経営者にとってはフォーマルな制度がたびたび変更されることは、森林管理の戦略の変更を絶えず迫られることを意味する。その

ような中では管理が不安定化していくことを余儀なくされる。フォーマルな制度を限られた取引関係の中で維持してきたということが、制度変更を抑え、安定的な管理を促すこととなっていたと考えられるのである。

つまりここからは、伝統的な木材市場が、互酬性というインフォーマルな関係原理から生まれた義務感や規範を前提にして、危機的状況を個々の業界内部のアクターが連携して対応することで乗り越えていく様子が見えてくる。伝統的な木材市場は、業者間の密接に組織化された隙のないネットワークから成り立っていて、その中で供給の慣習的な調節の中で、過度な価格競争や買い叩きが抑え込まれていた。そして互酬性は、業界内部のアクターを結びつける連帯の源泉であった。

しかし、ブラウが述べるように、互酬的な関係の確立は、緊張関係の確立をとともなうものでもある。互酬性を基礎におく木材売買のネットワークの中では、取引相手の要求に応じることのできない業者の情報は、直ちにネットワークの中を伝わっていく。取引の停止に対して、他の業者から木材を買い集めて流通量を増大させれば、その業者は1つの業者だけでなく、ネットワーク全体のなかで取引関係を失うことになるだろう。そこでは、一方の業者の市場をコントロールしようとする努力に取引相手が呼応し応答しつつ売買が反復されていくなかで、ようやく業者間に信頼関係が確立され、相互の利益やコンフリクトを回避しようとする意識が生まれていく。互酬性という関係原理は、「緊張を埋め合わせつつ、それをコントロールする社会的メカニズム」でもある (Gouldner 1960 : 164)。

木材市場といっても、太く大量の木材が常時流れている経路から、特定の地域内での細くてしかも不定期にしか取引が発生しない経路まで多様であるが、いずれにせよ、木材市場は、あくまでローカルな売買のネットワークによってコントロールされてきた。これまで森林管理を支え、方向づけてきたのは、特定の地域内での森林利用の制限や、また木材の売買それ自体の制限よりもむしろ、特定化された木材売買のネットワークの中での木材供給の調

節とそこから創発的に生成された木材市場のコントロールだったのであり、林業経営は、それらを組み合わせながら森林の維持管理を続けてきたのである。

2.4. 投機の抑制としての人工林経営への転換

以上のように、林業経営における森林管理の発達を支えてきたのは、木材需要の増大やそれにともなう木材価格の上昇よりもむしろ、ローカルな売買のネットワークの中での取引を通じた相互関係から立ち上がっていった「持続可能な森林管理のメカニズム」だったと考えられる。林業経営者にとって、人工林経営への転換と、その中での育林体系の確立は、投機的な取引を抑制し、資源として、山林をより持続的に利用していくための戦略であり、またそれは、市場のルールや慣習を習得していくことと同義であった。

元来、木材の売買は、需要に左右されやすく、価格の変動幅も極端に大きい。それゆえ木材需要の急激な増大やその中での木材価格の急激な上昇は、管理の定着よりもむしろ、投機的な売買を拡大させて、かえって林地の荒廃を拡大させることになりやすい。森林資源の持続的な利用という点では、木材価格の低迷は確かに危機的だが、その急激な上昇もまた危機的状况を招きやすい。そのような価格の不安定さが引き起こしていくことになる事態として森林管理の危機を経験し、それをふまえつつ、市場に精通してきたアクターのあいだで取り組まれ、発達していったのが、互酬的關係を基礎に、目の届く範囲の中で供給全体をコントロールすることで木材の買い叩きや投機的な売買を抑制しつつ、長期的な計画に基づいて木材を売買し、再造林、すなわち投資に必要な収益を安定的に確保していくという戦略だったと考えられる。そして目の届く範囲での安定的な取引関係の形成と維持が重視される以上、取引に参画する際には、業界の歴史的な成り立ちを無視することができず、地域や用途に固有の取引をめぐる業界内部のルールや慣習、さらには流通する商品の品質に対する習熟が不可欠となる。

このことは、森林管理の発達の契機が、市場メカニズムへの精通を通してパターン化されていくことにあったということを示している。戦後の造林政策や林業政策の展開から、日本における林業経営のあり方や、そのなかでの施業組織の整備、体系化は、政策的な補助によって確立されてきたものだと思われがちである。確かにとりわけ戦後林政の展開を振り返ってみれば、一面ではそのような政策措置にしたがって施業を行ってきた地域も少なくないが、とりわけ伝統的な林業地では、特定の市場との関係が深まっていく中で、それぞれの地域において独自の施業体系、あるいは経営のモデルが発達し、それぞれに合わせた育林サイクルが形成されてきた。つまりもともと施業の体系化は、それぞれの林業経営が、ローカルで、用途も細かく分かれた市場と対峙し、どの市場にどのような木材を供給するのかを、地域特性に適合させるかたちで試行錯誤を重ねながら、自ら計画的な施業体系を組織化してきた歴史と深くかかわっていると考えられる。

そもそも市場メカニズムへの接触は、森林の荒廃を加速させていく要因として捉えられることが多い。しかし、以上の事実が示しているのは、日本における伝統的な木材市場には、計画的な施業を喚起する一面があったということであり、林業経営者は、販売経験を積み重ねる中でそれぞれが、市場からの距離や経営規模、地域特性（例えば、植栽に適合的な樹種、成長の速度、木材の乾燥に必要となる風の向きの計算等）などに適合的な施業組織を整備してきた。それゆえに、人工林経営を基礎にした森林管理の継続は、市場から安定して育林の資金を調達できていたという面も重要ではあったが、むしろどのような売買のネットワークが支えコントロールしている木材市場と取引関係を保ってきたのかに影響を受けていくことにならざるをえなかった。林業経営の集積にともなって、板材に特化する地域や柱に特化する地域など、産地が分化していくことになったが、それはこのような、さまざまな市場への参入と撤退、新たな供給経路の構築と選別をめぐる試行錯誤を繰り返す中から形成されてきたという面もあるのである。

「経済に内蔵された持続可能な森林管理のメカニズム」には多様な形態がある。ひとつの地域には複数のメカニズムが複合的に存在しているのが通例であり、林業経営者は、それぞれのメカニズムに精通し、供給経路を選別したり、あるいは組み合わせたりして計画的な施業体系を整えてきた。そもそも森林管理を支え方向づけてきた市場自体が、このようなローカルな売買のネットワークや、そこから立ち上がってきた制度的条件に依拠して成り立ってきた以上、その地域における林業経営の成り立ちや市場で流通した習得が必要とされる知識は、そこでの森林管理が経験してきた歴史と切り離して論じることはできない。

木材市場に組み込まれた「持続可能な森林管理のメカニズム」は、そのローカルな成り立ちゆえに、木材市場にはそれぞれ固有の歴史があり、ネットワークの規模や流通する木材の量も多様である。このことは、個々の林業経営のあいだでも、経営の規模や歴史に応じて市場メカニズムへの習熟度や経営に危機が生じたときの状況の定義に差異が生じてくることを意味している。

3. ローカル・マーケットとしての木材市場：概念的検討

3.1. ローカル・マーケットの危機としての森林荒廃問題

このように見れば、今日拡大している林業経営者による、現状の木材市場からの離脱の動きの拡大は、まさにこの、ローカルな木材市場が衰退しつつあることを示していると考えられる。つまり、森林管理の衰退が「市場の危機」のなかで起こっているというとき、そこでいう「市場の危機」とは、すなわち、このようなローカルなアクターのネットワークから創り出され、フォーマル／インフォーマルな（あるいは、明文化された／暗黙の）取り決めによってコントロールされてきた「持続可能な森林管理のメカニズム」を備えた市場、言い換えればローカル・マーケット（local market）が危機に直面していることを意味していると考えられるのである。

では、ローカル・マーケットとは何か。今日に至る市場経済の発達が、た

だローカルな市場における日常の取引の反復の中から自然発生的に起こってくる事態ではなく、国家による集権的・一元的な管理・統制をめざした国家による政策介入を契機とした市場を支える社会構造の転換とそれともなうローカル・マーケットの解体の中で起こったものであることを最初に論じたのは、カール・ポランニー (Karl Polanyi) であった (Polanyi 1944)。

3.2. カール・ポランニーとローカル・マーケット

ポランニーによれば、かつて市場は、歴史的・地域的に発達してきた社会関係の中で厳格にコントロールされ管理されていた。しかし、産業革命期以降のイギリスでは、市場はそうしたローカルな文脈から切り離され、社会が市場にコントロールされていくことになった。そこではすべての生産が販売のために行われ、すべての所得がそのような販売から生まれるように社会全体を再編成しなければならないから、労働、土地、貨幣という、ポランニーが言うところの「本源的生産要素」までが市場経済に組み込まれ、商品化されていくことになった。ポランニーが「大転換 (great transformation)」のはじまりに据えたのは、こうした国家の介入を契機にして、それまでローカルな社会関係の中でコントロールされてきた孤立した諸市場を単一の市場経済へと再編するステップと、その中で引き起こされる市場を支える社会構造の解体・再編のことである (Polanyi, 1944 : 76)。

ポランニーにとって、ローカル・マーケットとは、「生産は生産者の要求に応じて規制され、したがって生産は利益の出る水準に制限された」市場であった (Polanyi, 1944 : 111)。生産者の利益追求が生産に対する制限をもたらすことがない遠隔地取引とは異なり、そこは生産者の利益追求が生産に制限をもたらす世界として捉えられている。

そしてポランニーは、ローカル・マーケットの危機を、国家による自由放任的な「自由市場」の生成とそれともなう多数のローカル・マーケットを根底から支えてきた社会関係の構造の再編・消滅として定式化している。歴

史的に見れば、そもそも人間が貨幣利得の最大化を達成しようとして行動するものと常に期待される市場組織の成立には、国家による政策介入が不可欠だったことを論じたのである。

3.3. 「単一の市場」と資源管理との緊張関係

つまり、ポランニーによるローカル・マーケットの危機の定式化は、財の生産と分配の秩序を自己調整的なメカニズムに委ねてしまう市場経済は、そもそも国家による集権的かつ計画的に組織された継続的な干渉の飛躍的な増大によって拓かれたということを示している。ローカル・マーケットは、「国内ないし全国市場の生みの親ではなかった」のである（Polanyi 1944=75：81）。財の生産と分配の秩序が自己調整的なメカニズムに委ねられた市場経済は、既存の市場に対する政治的な干渉と特別な立法なしには成立しない。そのような「自己調整的市場」の領域の拡大は、管理、統制、干渉の必要性を取り除くどころか、その範囲を途方もなく広げさせたのである（Polanyi, 1944=1975：191）。それゆえにポランニーは、「自己調整的なメカニズム」に支えられた自由市場を、現実の市場、つまり社会制度というよりも、その純粋な形態においては存在し得ない「まったくのユートピア」（Polanyi, 1944：3）と呼んだのだと考えられる。

ポランニーについては今日、「自由競争的な市場組織の絶対的優位を認めることによって経済を営むことの危険性を説いた人物」という評価が広く定着している。しかしここではむしろ、そうした自由競争的な市場組織が、従来生産と供給をコントロールしてきた「ローカル・マーケットの危機」をとめないながら創出されたものであるという歴史的な事実を、ポランニーがとくに注視していたということを確認しておきたい。

そして、ポランニーのローカル・マーケットという観点が示唆的なのは、このようにして起こってくる国家による市場の無理な転換の影響として、その自然資源の管理との緊張関係を視野に入れている点である。ポランニーは

次のように述べる。

生産は、人間と自然との相互作用である。それゆえ、もしこの過程が交易や交換の自己調整的メカニズムを通して組織されることになれば、そのとき、人間と自然はこのメカニズムの軌道に乗らなければならない。人間と自然は需要と供給に従属しなければならない。言い換えれば、商品つまり生産される財としての扱いを受けなければならない。それがまさしく市場システムのもとにおけるしくみであった。(Polanyi 1944=1975: 179)

元来、ローカル・マーケットは、人間と自然、生産組織を同時に保護する原理を組み込んでいた。そしてそこでは、さまざまなコンフリクトをとまいないながらも、マーケットを通して人びとの経済活動は保護され、マーケットを通して共存共栄が図られてきた。「この制度(=ローカル・マーケット: 筆者注記)はそもそものはじめから社会の支配的経済組織を市場活動の側の妨害から守るべく意図された数多くの安全装置に取り囲まれていた」のである(Polanyi 1944=1975: 82)。

それゆえ、市場の転換とは、ローカルな市場が、そのコントロールを失っていく過程であると同時に、そのことが、それまで維持されてきた人間・自然・生産組織の保護の解体を招き、それゆえ従来自然資源を管理してきた組織の解体につながっていくことになることを意味している。自然資源の管理と経済とのあいだに生じる矛盾を真正面から引き受けることになるのが、それまでローカル・マーケットを相手にした取引に従事してきた生産組織なのである。

しかし、ポランニーは、市場の転換が進行していく中で、市場が完全に需要に方向づけられ、統制されるようになってはと考えてはいなかった。むしろ市場の転換過程においてなお、既存の市場を利用して供給のコントロールを維持しようとしたり、自由競争的な市場原理に対する抵抗や軌道修正を求める

動きが頻発していく様子をポランニーは捉えていた。そしてポランニーは、このようなそれまでとはまったく異なる制度的条件に支えられた新たな市場の勃興に対する人びとの対応を、主に自由放任と自由貿易を手段として利用する「経済的自由主義の原理」に対して、人間と自然資源だけでなく、生産組織の保護を追求しつつ、市場の有害な働きからもっとも直接的な影響をこうむる人びとの支持に依拠し、保護立法、圧力団体などを確立して対抗する「社会防衛の原理」と名づけている。「人間及び自然資源だけでなく、資本主義的生産組織それ自体も、市場の破壊的影響から保護されなければならなかった」(Polanyi 1944=1975:181)のである。

このように、ポランニーの立論は、ローカル・マーケットの危機を読み解く際の焦点が、国家の政策介入と市場の転換とのかかわりを問うことにあることを示唆している。ローカル・マーケットが直面する危機それ自体を、日々の経済活動の延長線上に起こる自然発生的な現象ではなく、市場という制度の人為的、計画的な構築のひとつの帰結として捉えているわけである。そして、今日の森林荒廃問題は、いわば、このような国家の政策介入を契機にした市場の転換の過程の中で生じるローカル・マーケットの危機の現代的形態であると考えられる。

すなわち、以上の議論から見れば、先に述べたような林業経営者の「あきらめ」は、ローカル・マーケットに代わる新たな制度的条件を備えた木材市場、言い換えれば既存の木材市場とはまったく出自の異なる木材市場が今日の木材売買を規定し始めたことから生じていることが示唆される。同時に、ポランニーの議論は、森林荒廃問題のメカニズムを明らかにしていくうえで、木材の生産と供給に対していかなる計画的な介入が行われ、そこからどのようなタイプの市場が成立していくことになったのか、今日の林業経営者の行動が、そもそも何を目指した対抗なのかといったことを実証的に明らかにすることができるかが焦点になることを示唆する。

3.4. ジャガーノート・マーケットとしての「単一の市場」

以上のように、ポランニーは、市場の転換の発端を捉えるための概念として、ローカル・マーケット概念を置いている。とりわけ重要なのは、ローカル・マーケットや遠隔地市場が、自由市場の歴史的起源ではないというポランニーの着眼点である。政治的な過程、あるいは政策的な介入をともないながら成立し拡張されていった市場メカニズムとしてポランニーは自由市場を捉えていた。

しかし、ポランニーは、単一の市場を、ただ計画的に創出された自由市場、あるいは自己調整的市場としてのみ捉え、ローカル・マーケットを対置したわけではない。もうひとつ、単一の市場について、ジャガーノート・マーケット (juggernaut market) という概念を提起し、その特徴について論じている。ローカル・マーケット概念についてより深く検討する観点から、このジャガーノート・マーケットという概念の含意についてここで見ておきたい。例えばポランニーは次のように述べている。

市場メカニズムが社会全体の生命にとって決定的な要因となった。当然、新しく登場した人間集団は、以前には想像もつかなかったほどの「経済的」な社会になった。「経済的動機」がその世界の最高位に君臨し、個人は、絶対的な力をもった市場 (juggernaut market ; 筆者注記) に踏みにじられるという苦しみを受けながら、その「経済的動機」に基づいて行動するように仕向けられた (Polanyi 1947=2003 : 55)。

ここで重要なのは、経済的動機が最高位に君臨したという指摘ではない。むしろここまでの文脈で重視したいのは、ポランニーが、このジャガーノート・マーケットという着眼から、個人を特定の方向に「仕向け」る力として機能する市場の発生を捉えている点である。個人を苦しめ、踏みにじる絶対的な力をもつ、そのようなタイプの市場の出現を捉えているのである。この

ことは、これに続けてポランニーは次のように述べていることからわかる。

そして、功利主義的世界観へのこのような強制的な改宗が、西洋人の自己理解を致命的に歪めてしまったのである（Polanyi 1947=2003：55）。

つまり、ポランニーにとって、単一の市場への人びとの組み込みは、宗教的な「改宗」を強いることと変わりがないのである。ローカルな市場にはそのような傾向は見られない。政策当局による継続的な介入によって創出され、また人びとの「自由」を奪う市場という、現在に至る市場メカニズムの特殊性や、その歴史的文化的起源を発見する手がかりとして、自己調整市場やジャガーノート・マーケットという概念が据えられているのである。

では、以上のようにローカル・マーケットについて概念的に整理してみると、現代日本における森林荒廃問題はどのように理解することができるだろうか。概念として、ローカル・マーケットを分析の軸に据えたとき、この問題はどのような問題として見えてくるだろうか。最後に、この点について若干の検討を行ってみたい。

4. ローカル・マーケット論の文脈

4.1. ローカル・マーケット批判としての戦後林政

ここまで、伝統的な木材市場のあり方について、「ローカル・マーケット」という着眼の導入可能性を念頭に置きながら考察を進めてきた。そして、現代日本が直面している森林管理の危機は、まるでポランニーが明らかにした歴史過程に沿うようなかたちで進んでいる。すなわち、「ローカル・マーケット」としての木材市場が解体され、再編されていく状況のなかで、「経済に内蔵された持続可能な森林管理のメカニズム」が失われ、森林の荒廃が拡大していることがうかがわれるのである³⁾。

この点について日本の林業経営の危機を論じていくうえで重要だと思われ

るのは、このようなローカルな木材市場のあり方を最初に批判し、その再編の必要性を今日まで一貫して指摘してきたのが、実は林野庁を中心とする森林管理をめぐる政策の立案・実施を担う政策当局だったという点である。例えば日本の高度経済成長期における木材の生産・供給に対する政策介入が、既存の産業のあり方に対する批判、あるいは否定からスタートしていた。

高度経済成長期、増大する木材需要に対応して、林野庁は供給拡大のために外材市場の整備を急ぐと同時に、林業経営の近代化を追求した。木材需要が急激に上昇していく中で、森林行政は、供給拡大に向けた計画を打ち出し、それに基づいて新たな政策を次々と立案し、実施に移していくことになる。外材市場の創出、施業の計画化、あるいは集権化、そして拡大造林政策などの政策は、従来のローカル・マーケットに代わって、木材供給の集権的なコントロールを試みた政策だったといえる。

また2001年に制定された「森林・林業基本法」以降、住宅用の集成材生産をめぐる政策領域が新たに確立したが、そこに参画し、議論を主導してきたのは、それまでローカルな木材市場を基礎にして経営を営んできた製材業者や、その中で森林管理を継続してきた林業関係者ではなく、外材製材業者を中心とするローカルな木材市場とは隔てながら市場の再編を推し進める製材業者や、こうした製材業者の対応を林業の再生に結びつけて捉える研究者だった。こうした特定の立場のアクターの主張に政策決定が影響を受けるようになっていくなかで、ローカルな木材市場の中での小規模な木材生産・木材供給は批判、否定され、そうした木材市場それ自体が、木材売買における周辺的な位置に置かれていくことになっている。このように、森林管理をめぐる政策を立案・実施を担う政策当局の関心からは、潤沢な補助金や経営指導の組織化によって国家が林業、あるいは木材産業全体の成り立ちを転換していくのだという強い意志がうかがわれる。とかく林業をめぐるのは、今日、補

3) この歴史過程については、大倉（2008）で詳しく論じている。

助制度抜きには成り立たないことが指摘されているが、そもそも誰が木材の取引をめぐる制度構築を担うのかという、市場形成をめぐる核心的な部分においては林業経営と政策当局とは対抗的な関係に位置しているとも言えるのである。

ローカル・マーケットという着眼は、かえって現状の市場の特徴を照らし出す。と同時に新しい市場社会を構想する手掛かりともなりうる。求められるのは、現状の市場に対する「ライバル・ビュー (rival view)」(Hirschman 1992) に着目し、それを掘り起こしながら、市場の生成や安定を支え、方向づける知識の来歴や、その組織的基盤を深く捉えうる視点なのである。

4.2. ローカルな木材市場の開放性

そして、以上のように木材市場をめぐる人びとの対応を振り返りながら森林管理の変化をたどることで浮かび上がってくるのは、現状の木材市場の閉塞性であり、伝統的な木材市場の開放性である。

ローカルな木材市場は、市場に参画するアクター相互の資源の保有状況や規模を認識できる取引関係が集積した市場である。新しい取引相手に対しては、知識の習得や商慣習への精通など相応の障壁を設けつつも、その都度取引のなかで規模や木材の質をめぐる調整が行われる。そのような融通や調節のなかで、慣習的な取引が形づくられていく。このような意味で、開放的であるといえる。ローカルな木材市場は、このように相互が抱える制約条件に対して寛大な、相互補助的な売買のネットワークに支えられてきた。

それに対して今日の木材市場は、このような人々のあいだでの調整や融通を働かせることがかなり困難になっているということが林業経営者の言葉や行動からはうかがわれる。今日の木材市場は、林業経営者にとっては、資源が流れる空間としての木材市場の成り立ち自体が、林業経営者の頭越しに決められていく市場であり、林業経営者から見れば、このプロセスは、保有す

る資源や経営規模に合わせた市場制度を操作し、生産と供給全体を調整する可能性、あるいは機会が閉ざされていくことを意味していたと思われる。ローカルな木材市場の解体が進行していく中で、安定的な取引の回路が閉ざされ、木材の取引は閉塞していくことになった。その結果、木材は安定的な供給経路を失って、行き場がなくなり、結果的に林業経営者は山林を放置したり、あるいは価格の上昇とともに大規模に伐採を行って再生林を放棄するという行動を引き起こしやすくなっていると考えられるのである。単に価格競争が激しくなっていったというだけでなく、そのなかで、ローカル・マーケットが閉ざされ、新たな制度的条件を備えたグローバルな木材市場が勢力を拡大していく中で、現状の木材市場に対する信頼が失われ、林業経営者たちは、管理の放棄や再生林の放棄という決断を下しているのである。

4.3. 市場生成の文化的次元の解読

このような過程をたどって問題が発生・拡大しているとすれば、そもそも今日ある木材市場というのは、誰と誰のあいだで市場が形作られていったのか。言い換えれば、どのような価値関心と動機付けをもつ人物や組織のあいだでマーケットが組織されたのか。またそれがどのような人や組織を批判して成立し、あるいは結果として誰をマーケットから締め出す結果になっているのか。そしてこのように管理放棄や再生林放棄が拡大していること、またそれを生じさせる林業経営者の「あきらめ」の規定要因について考えるためには、木材の需給関係だけでなく、木材のマーケットを成り立たせている企業組織や業界組織に焦点を据えて、マーケットそのものの歴史的、文化的起源を知る必要があると思われるのである。このような意味で、森林問題を価格問題として論じることは、もはやあまり意味がないのかもしれない。求められているのは、木材資源が流れる空間としての木材市場を支え方向づけるアクターの歴史的・文化的な意味での出自を読み解き、その市場への参入やその影響を分析し、意味づけることができる視点の構築である。言い換え

ばそれは、市場生成の文化的次元を問う視点ともいえる。

市場生成の文化的次元は、市場を創出するに当たって、それを主導する人物や組織が、他者に対してとる決して寛容とはいえない態度から見て取ることができる。他者に対して「改宗」を強いるプロセスや、異端視して遠ざけるプロセスが、市場生成にはともなっている。このような市場生成をめぐる人びとの具体的な出会い、接触の局面で生じる需要やコンフリクトといった次元に着目して市場生成を問い、また市場の特質を捉える視角として、ローカル・マーケットという着眼は、きわめて有効だと考える。

本稿では、今日の林業経営者たちのあいだで生じている「あきらめ」を足がかりとして、それを読み解く着眼を得るために、まず伝統的な木材のマーケットの成り立ちを具体的に把握し、またその変動を読み解く着眼点としてのローカル・マーケット概念を導出するとともにその意義について考察を進めてきた。この着眼を通して、伝統的な市場を把握できると同時に、今日の市場のあり方がまったく相容れないものであることが理解できるようになると思われる。今日の林業経営者たちが直面している困難は、価格競争に巻き込まれているといった単純なものではなく、これまで、自らを支え、信頼し続けてきた取引の形態が失われつつあることにあるのである。

文献

- Blau, Peter M. 1964. *Exchange and Power in Social Life*. John Wiley & Son=間場寿一・居安正・塩原勉訳, 1974, 『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』新曜社.
- Dobbin, Frank, 2005, "Comparative and Historical Perspectives in Economic Sociology" Pp. 26-48 in *The Hand Book of Economic Sociology*, edited by Neil Smelser and Richard Swedberg. Russel Sage Foundation and Princeton University Press.
- Granovetter, Mark, 1985, "Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness" *American Journal of Sociology* 81-3: 481-510.

- Gouldner, Alvin, 1960, "The Norms of Reciprocity: a Preliminary Statement", *American Sociological Review*, 25 (2): 161-178.
- Hicks, John R. 1969. *A Theory of Economic History*. Oxford University Press = 新保博・渡辺文夫訳, 1995, 『経済史の理論』(講談社学術文庫1207) 講談社.
- Hirschman. 1992. *Rival Views of Market society: and other recent essays*. Harvard University Press.
- 緑の列島ネットワーク編, 2000, 『近くの山の木で家をつくる運動宣言』農文協.
- , 2004, 『地域材の家づくりネットワーク』(林業改良普及双書147) 全国林業改良普及協会.
- 村畠由直, 1978, 「木材関連産業の成長と市場構造」林業構造研究会編『日本経済と林業・山村問題』東京大学出版会: 29-104.
- , 1987, 『木材産業の経済学』日本林業調査会.
- 大倉季久, 2006, 「林業問題の経済社会学的解明: 徳島県下の林業経営者の取り組みを手がかりに」『社会学評論』56 (3): 546-563.
- , 2008, 「環境社会学としての『新しい経済社会学』: デフォレステーションの比較経済社会学に向けて」『経済社会学年報』30: 135-144.
- Polanyi, Karl. 1944 [1957] = 2001. *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*. Beacon Press = 吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳, 1975, 『大転換: 市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社.
- 1971, "Our Obsolete Market Mentality." George Dalton ed., *Primitive, Archaic and Modern Economies: Essays of Karl Polanyi*, Boston: Beacon Press = 平野健一郎訳, 2003, 「時代遅れの市場志向」玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』筑摩書房: 49-79.